
え？ナニ言っちゃってんの！？

不知火 暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

え？ナニ言っちゃってんの！？

【Nコード】

N8739Q

【作者名】

不知火 暁

【あらすじ】

高校三年生の空海陸人の十八歳の誕生日に、陸人の元へやって来た九重千切。彼女が下校途中の陸人に言ったのは「わたしと結婚しろ」だった。え？何言ってるのこの人！？陸人は美しいのに変人、という残念な千切に哀れみ哀れまれ。

はじまり

意味が、分からなかった。

「え、ええええ！？」

正直これは、驚くとかそういう話じゃない。

目の前で。

僕、空海陸人そらみくがひとの目の前で

人が、死んでいた。

血飛沫が、舞う。

それは、人かどうかも判断しにくい程、無残な死体だった。

両足と、両手の爪が全て剥がれ、膝や肘は曲がるべきではない方向に曲がっている。

腹の肉は皮膚を剥がされて露あらわになっていて、胸には大きな鋏あばこが二本と、大きなナイフが深々と刺さっている。

そして首は 胴体から切り離されていた。

一面の血の海に沈む胴体と、首。

その首が表すのは、僕の知り合いの顔であった。つい昨日辺りに出会った美しい女性。

胴体とは反対に傷一つ無い、綺麗な顔。

朱に染まっっていく、美しい金色の髪。

「あ…あう…」

状況が理解出来ない。

込み上げてくる嘔吐感。

口の中に酸っぱいモノが広がる。

胃の中の物を、全て吐き出すような。

「ぐうぐうっ…!!…どうして…」

どうして、こんなことになった？

それは、昨日に遡る。

死 死 死 死 死

「わたしと結婚しろ」

高校三年生、空海陸人。

今日は、七月一日。

つまり、僕の誕生日。十八歳の、誕生日。

そんな日の放課後。

下校途中の僕の前に現れたのは、果てしなく変な女だった。

金髪ストレートの長い髪に、碧い瞳。

紅い高級そうなドレスに包まれた豊満な胸に、服の上からでもわかる括れた腰。

細い、すらりとした手足。

背は高く、百八十近くある僕と、そう変わらない。

一言では表せない程、その女は美しかった。

顔の造形も、体のバランスも。

全てが完璧、といった女だった。

そんな女が僕の帰路に現れたかと思えば、僕の進行の邪魔をしてくるきなりそんなことを言ってきた。

「は？」

ナニイツチャッテンノ？

突然のプロポーズに面白いボケを返すこともできず、当然の反応をとってしまっつ。

当たり前だ。

「だから、わたしと結婚しろ、と言っただ。言語理解能力の低い男だな」

女は苛立ったように言った。

そんな風にイラつかれても…

「ええと。初対面…ですよね？」

こんな女、一度会ったら二度と忘れないだろう。

「そう…なるのか？」

曖昧な言い方である。

「わたしは昔から貴様のことを知っていたがな。空海陸人」

どこの国の人かも分からないおかしな女に呼び捨てにされた！
ってか何なんだこいつは。

「さつきからおかしな女やらこいつやら、失礼だな。貴様は」

心を読まれた!!!?

「わたしには九重千切「このえちぎり」という名があるのだ」

日本の（変な）名前だった。ハーフか？

「失敬な。純粹なフランス人だ」

「いや、おかしいだろ！」

しまった。ツツ込んでしまった。

「おお。威勢が良いな。流石、わたしの見込んだ男だ」

九重は、満足そうに頷いた。

「ええ、と。九重、さん。何故」

「千切で良い。これから夫婦めおとこになるのだからな」

「何故僕は貴方と結婚することになっているんでせうか!？」

「そ、そんなこと言えるか。たわけ…」

何故そこで顔を赤らめる!？

僕何かしましたか!？

「まあ良い、陸人」

「呼び捨てですか」

「く、くがたん…」

「いや、ニツクネームで呼べつつうことじゃねえよ!！」

「いちいち五月蠅いな。だからモテぬのだよ」

「それに対しては反論させて頂こう!！」

いや、モテる訳でもないけどね？
告白ぐらいはされたことあるよ！

「……………」
「可哀想なものを見る目でこっちを見るな！言っとくが妄想とかのオチじゃねえぞ！」

「そうか。うん。そうだな、空海くん……」

「物理的じゃないほうで距離を置かれた！？」
シヨックをうける僕だった。

気付くと、九重は肩を揺らしてくつくつと笑っていた。

九重の笑顔は、正直心を奪われるものだった。

普通に、美しい。

可愛いじゃなく、美しい。

クラスの平凡な女子とは、格が違う。

「九重さんは、いくつなん……ですか？」

「……貴様よりも年上なのは確かだよ」

九重は微笑んで言う。

やはり、美しい。

「ああ、そうか」

何かを思い出したようにそう言うと、僕を見上げて、

「Happy birthday・陸人」

笑った。

僕は人生で初めての初恋を、十八の誕生日に唐突なプロポーズをしてきたおかしな女に使うことになってしまったようだった。

この世とあの世の境界線

「陸人が十八になるのを待っていたのだよ。感謝したまえ」

「……。」

「くがたん。わたしは饒舌な人が好みなのだが」

「…知らん。というかくがたんって呼ばないで下さい」

「つまらんのう…。…というか陸人顔が赤いぞ？熱でもあるのか」

「九重さん。わざとやってますね？」

「敬語とは良い心がけだな。わたしに敬意を表してくれているのか」

「親しくなりたくねえの！」

「くつくつ。愉快だな」

全然愉快じゃねえよ。

とりあえず九重の話を書くことにした僕は近くのファーストフード店に九重と一緒に入った。

僕は迂闊な奴だと、痛感した。

九重はかなり目立つ奴だということを忘れていた。

金髪に碧眼。パーフェクトなボディバランスに、真っ赤なドレス。

店に入った瞬間に、辺りがどよめいたかと思えば僕たちは視線を集めまくった。

しかも、九重は僕の腕にしがみつくようにひっついていっているのだ。

理不尽な嫉妬の念まで送られてくる。

ばかだなあ、僕。こうなることくらい少し考えれば分かっただろうに。

相当、動揺してんだな…。

こんな誰もが振り返るような綺麗な女の人をつれて（しかも腕組んで）たらそりゃ浮かれますよ。

男ですもん！

変な人だけど、美しいことに変わりはないし。

肘に感じる柔らかい感触が僕を赤面させる主な理由である。

「なあ、陸人」

「何だよ」

敬語じゃなくても怒られなさそうなので、普通に話すことにしよう。

「わたしのこと、好きか」

「はあ!？」

「わたしはす、好きだぞ……」

「おい、待て待て待て。九重。落ち着け。お前は話が唐突過ぎだ! まず……」

「わたしは好きだぞ!」

「一回黙れよ!」

思わず怒鳴る。

「黙れだよ……」

「ひでえ……あんな男に捕まって、可哀想に……」

「騙されてんのよ」

周りからぼそぼそと聞こえてくる声が胸に刺さる。

うとう……。これは僕が悪いのか!?

九重はくつくつ笑っている。ぜってえわざとだ!

「まあ、落ち着け。陸人。血圧が上がるぞ」

「上げようとしてんのは姫さんですがね!」

「言っただろう。わたしは饒舌な男が好みだと」

「言っただな。それが必要以上にツツ込ませてんのな!」

呆れながらツツ込んで、先程買ってきた(バイトであろう少年が僕らに注文を三回ほどしてきて、コーラを二度落とした。)コーラを飲む。

九重は僕が奢ったオレンジジュースを眉を顰めて飲んでる。

舌に合わなかったのだろうか。

「で、訊くけど。なんで僕と九重が結婚するとかの話になってんの」

「決まっているだろう。わたしがその……、陸人に、一目惚れを、したからだ……」

……。

…はい？

つまり、どういうこと？

一目惚れしたから、結婚しようと思った、とか？

「て、照れるのう…。」

九重は恥ずかしそうに頬を染めて言う。

可愛いなこんちくしょうめ！！！！

この女、誘ってやがんのか。

「つまり、許嫁…とかでは？」

「わたしの中では許嫁だ。婚姻適齢まで待ったのだぞ」

「…さいですか」

僕は溜息混じりに言う。

「では、縁があればまた会いましょ」

「待て待て待て待て！！！」

ちっ…。逃げられなかったか。

「わたしを置いて行こうとするとは何事だ！」

「はいはい。送りますよ。自転車取ってくる」

「送る？何故だ。わたしは陸人の家に行くのだからそのまま一緒に

行けば良かるう」

「お前は僕を苛めて何が楽しいんだよ！？」

その答えは予想もしていなかったぞ！！何故なら僕が考え無しだからさー！

「えー！」

「連れて行ってくれんのか？」

九重はしょんぼりとした感じに僕を上目使いで見ってくる。

ううう…。こいつは僕の好みを弁えているのか！？

「〜っ！分かったよ！すぐ帰れよ！」

「え〜…」

「え〜…、じゃない！」

僕は不満そうな九重に言っつて、立たせる。

正直言っつと、この注目されまくっつてる空気に耐えられなくなっつてき

た。

「ほら、行くんだろ？」

コーラが入っていた容器をゴミ箱に投げ入れて、後ろの九重に言う。

「ああ」

九重はにこにここと微笑んで嬉しそうに頷く。

もう。いちいち可愛い奴だ。

九重もゴミ箱にオレンジジュースが入っていた容器を捨てて、僕の腕にくっつく。

いや。今更だが、僕はいつこんな美人に一目惚れをされたのだろうか？十八歳になるまで待っていたということは、今日初めて会っていきなり恋をした、という訳ではなさそうだ。

しかし、こんな可憐な女性に会ったことをそう簡単に忘れることなどあるのだろうか？

というか、なんで僕の誕生日を知っているんだこの女は！？

ファーストフード店から出て、家に向かいながら九重のことを考えていると、ふと疑問に思った。

それを九重に尋ねようとした時。

すると、九重が僕から離れた。

「…？」

肘から消えた柔らかさが、少し残念な気持ちにさせた。

九重を見ると、九重は静かに虚空を見詰めていた。

「来た…！」

何が来たのか。訊こうとしたが、やめた。

僕の周りには常識の通じない何かが広がっていたからだ。

「は、はあああああ！！！！？」

そこは地上から五百メートルくらい離れているんじゃないかと思うくらい高い時計塔の

「落ち着け。動くと落ちるぞ」

屋根の上だった。

目の前には澄み渡るような青い空。いくら夏だからといって、六時を過ぎてこの明るさは異常だ。

九重は実に落ち着いたもので、この状況でも口調に焦りがみられない。

「な、なななな！？おい、ここどこ…」

「陸人。魔法使いというのを信じているか」

「はあ？何言ってるんだ。そんなん信じてねえよ！」

「そうか。わたしもだ」

九重は僕の隣でくすりと笑う。

どう見ても笑える状況ではないのだが。

相変わらず、九重の笑顔は美しかった。

見惚れてしまうほどに。

「しかし、魔法のようなものは知っている」

九重は、そう言った。

信じているではなく、知っている。

なるほど。

「それで、これはなんだ？」

僕が訊くと、九重は驚いたような顔をした。

「やけに冷静になるのが早いな。馬鹿だと思っていたから、これに

は驚きを隠せない」

「隠せ」

「くつく。まあ、そんなことはどうでも良い。」

僕が馬鹿だろうが馬鹿じゃなかるうが、どうでもいいいらしかった。

「下、見てみ」

「嫌だ」

「……」

「……、」

「何故だ！というか言い終わっていなかったのだからなあ！？」

「高所恐怖症なのです」

「何?! 知らなかった! 妻だというのに!」

あ、その話まだ続いてたんだ。

ちなみに高所恐怖症ではない。

九重に仕返しをしてみようと思っただけである。

僕だってやられっぱなしではないのだ。

しかし、思った以上にショックを受けていたようだったので、冗談だ、と言ってやると、すごい目で睨まれた。

おお…。美人なだけに迫力があるなあ! こええ!

「いいから下を見んか! たわけ」

言われて、素直に下を見る。

すごい高い。

高所恐怖症ではないけれど、立っている場所が場所だけに普通に怖い。

と、下に見えたもの。それは、

花畑だった。

「おお…。なんつうファンシーさ…。恐れ入った」

自分で言っていて意味が分からない。

ひょっとして僕は馬鹿なのか?

いや、今までよく馬鹿だ馬鹿だと言われたり(言ったり)したけれど! 全部冗談だと思っていた。

悲しい現実を目の当たりにした…。

馬鹿なこと落ち込む僕を気にすることなく、九重は話を進める。

「何が見える?」

「え…。と。花畑?」

「そうだな。それと」

九重は人差し指で前方を示した。

僕もその後を目線で追う。

そこには、小川があった。

「かわ?」

「そうだ。もうここがどこか分かったか」

先程自分が馬鹿だということに気付いた僕には質問の答えがさっぱり分からない。

「…まあ良い。そこも含めてわたしは陸人が好きだ」

僕が答えないところを見て、小さく溜息をついてから九重は言った。さらりと告白もどきも交えて。

なんだこいつ。惚れちまうぞ！

いや、もう惚れたけどね！！こんな綺麗な女の人に惚れない馬鹿野郎は男じゃねえ！！

「ここは、あの世とこの世の境界線…、狭間だ」

九重は僕のほうを向いて言った。

「あれが、三途の川と呼ばれているやつだ」
は？

「ええええええ！！？」

いやいやいやいや！落ち着け、僕。九重ちゃん、僕を嵌めて楽しいのかい！？

「嵌めてなどいない！」

「僕の心を読むな！プライバシーの侵害だ！」

「なんと。プライバシーなどという言葉を知っているのか！驚いた」
「おい！」

馬鹿にするなよ！馬鹿だけど！

「じゃあ…、何？僕ら死にかけてんの？」

それは驚きだ。気付かなかっただけで、僕らは車にでも撥ねられたのか？

だが、九重の答えはそういう類のものではなかった。

「いや。この場所は、常にわたしたちの近くに存在しているのだよ」
「????？」

「つまりだね。わたしたちがいつも過ごしているあの場所とこの場所、重なっているのだ。ただ、入ることが出来ないだけで」

「入ってんけど」

「そう、問題はそこだ。普通、人間がこの世界に立ち入ることなん

て出来ないのだ。なのに死にかけた人間が入れてしまう。何故だかわかるか？」

「意識がないから、か？」

「まあ、そうだろうか。精神の理がずれてしまうから、入ってしまうことがあるのだ」

「ふうん？」

「そして、管理人にあの世へ連れていかれる。運よく助かる者などめったにいない」

「管理人？」

「あれだ」

九重が見つめる先。

そこには、でつかいてる坊主がいた。

いや。てるてる坊主としか言いようがない。

ただ、書かれている顔がいかつい。

大きな空洞のような瞳に、くつきりとしたくま。口は歪な笑みを形どっていて、正直気持ちが悪い。

九重が言うに、あれが管理人らしい。

「で、僕らはなんでここにいるんだ？」

「アイツが来たからだ」

「ん？」

「わたしは、あれが近くにくるとここに入ってしまっただよ」

「あれ、何体もいるのか？」

「さあな。分からない」

「どうやったら戻れるんだ」

「あれに見つかることなくやり過ぎせば、戻れる」

「ふうん」

九重の反応を見る限り、心配はいらないみたいだ。

そう、思った。

その考えが甘かったことに、この時の僕は気付かなかったのだ。

あんなことになるなんて、思いもしなかった。

空海さん家のご家族事情

あれから少しして。

てるてる坊主がどこかにふよふよ飛んで行ったところで。

僕らは元いた場所にと戻ることができた。

幸い人通りの少ないところだったので、いきなり戻ってあたふたする僕を誰にも見られずにすんだ。

好都合というか…。なんとというか。

ちなみに九重ここのえはけるっとしている。

訊いてみたところ、よくあることなのだそう。

「わたしはそういう体質なんだ。あれが近くにくるとあの境界線の世界に入る」

九重は当たり前のように僕の腕にひっついて言った。

まあ僕は。

すごい経験が出来たな、程度にしか感じていないので、正直どうでもいい。

九重の事情など知ったことではない。

…思ったよりも、時間が経っていたようだった。

辺りはもう薄暗い。

九重は透き通るような白い肌と紅いドレスが輝くような存在感を放っている為、辺りが暗かろうがなんだろうが美しい顔に影は見られない。

「陸人くわにんの家に行こう」

「あー。そんな話だったっけな」

忘れたかと思っただけだ。

甘かった。

まあそういうことなので、僕らは空海家そけいみへと向かった。

死死死死死死

「いっぺん死んで来なさいな」

僕が家に戻った時、リビングのソファに寝そべっていた姉貴（空海かきくも風雲）が九重を見て発した第一声がそれだった。

弟にそれはねえだろ。

ちなみに我が家は僕と、姉貴、妹（空海氷月ひつき）、父（空海草水そくすい）、母（空海陽火よっか）の五人家族だ。

しかし母は一か所に留まることが出来ない人なので、今頃はヨーロツパのどこかにいると思われる。

つまり、ほぼ四人暮らしみたいなもの、ということだ。

父は仕事がよく出来る真面目な人で、帰りはいつも遅い。

だから僕の姉貴は昔から母代りのような立場だった。

考えてみればもう二十一歳。

早いものだ。

そろそろ良い人でも見つけてきてもいい年齢なのでは、と思ったりもする。

しかし姉貴は全く女らしさに欠ける人だ。

今だって…

下着姿である。

言葉遣いからは想像もつかない下品さである。
で。

「ええと…すみません」

笑顔だがどうやら怒っているらしい姉貴にとりあえず謝罪。

「なんか遅いわ、とか思っていたら…陸人くがひとさんはそんな美しい方に暴行をしていたのね」

「失礼なことを言うなよ！」

なんてことを言うんだ！

「今何時だと思っっているの」

姉貴の説教が始まった。

どうやら姿勢を変えるつもりはないらしく、ソファに横になったままである。

しかし文句は言わない。

僕は姉貴が世界で一番怖いと思うからだ。

前に姉貴がキレた時には一か月台所が台所として機能しなかった。

(あの惣菜生活は思い出したくもない)

「八時…です」

「そうね。つまり門限は過ぎてます」

高校生なのに門限が八時だということに同情はしなくて結構。

「ちよ、ちよっと待ってくれ。ええと…姉上？」

どう見ても母や妹には見えないだろうに、九重は疑問符を浮かべて言った。

「陸人の姉の、風雲です」

「風雲。陸人が悪いんじゃないんだ」

姉貴も呼び捨てだった。

「わたしが無理を言ってしまったから」

九重は僕の腕にくっつきながら戸惑ったように言う。

人見知りはしなそうなやつなんだけどなあ…。

「(九重、もしかして人見知りするタイプか?)」

それならば姉貴のことを事前に教えてやれば良かったな、と後悔しながら小声で尋ねる。

「(ん…そういう訳ではない。ただ、よく似ているな、と驚いて…)

「(似てる?)」

「(ああ、陸人に、良く似ている)」
「そっか?」

言われて、改めて姉貴を見る。

ショートストレートの黒髪に、細身の体。目はくっきりとした二重で、少したれ目気味。

普通な、美人。

どこにでもいそうな美人。

そういった感じ。

似ては…いるのだろうか？

「で。陸人さん。その方は？」

姉貴は九重を見て言う。

年齢がよく分からない九重は、姉貴より年上なのか年下なのか。

「ああ、わたしは九重千切だ。宜しく」

九重は微笑んで言った。姉貴はそれを見て、体を起こした。

おお。珍しい。姉貴が人前で姿勢を正すとは。

九重千切。恐れ入った。

「千切さん。うちの馬鹿弟がお世話になったようで」

「陸人を世話したことなどない」

九重は堂々と言った。本当に…はつきりとしている性格だな…。羨ましい限りだ。

「そう…。…千切さんは綺麗ですね」

姉貴は実に物事をはつきりと告げる人なので、いきなり九重に言った。

「風雲のほづが綺麗だろう。陸人に似ているのだし」

「それは褒め言葉になっていませんよ」

おい。

笑顔で失礼なことを言うなよ。

「たっだいまー」

そこに。

妹が帰ってきた。

「かざ姉メール送ったの気付いた　　って何、くが兄また暴行したの」

「またってなんだよ！してねえよ一度も！ってか二人して同じことを言うな！」

僕はどういう目で見られているんだ！

「え？じゃあ誰この美人さん。ってかめっちゃ綺麗！」

妹も思ったことを口にだすタイプ。

茶色の髪をサイドテールにして、少し吊り目気味の二重の目。姉貴と同じく、どこにでもいそうな美人といった感じの中学二年生。

九重には遠く及ばない。次元が違う。

「おお、妹君か。可愛らしいな」

「やあん！何この人！めっちゃあたしの好み！」

ちなみに妹、空海氷月は悲しいことに百合だ。

兄として抵抗があるのだけでも。

「太もも触らせて下さい！！！」

その発言は人としてどうだろう。

「遠慮させてくれ」

「ぶほっ！！！」

なぜそこで鼻血？

僕には妹がわかりません。

「千切さん。陸人さんとはどんな関係で？」

「結婚相手」

おおお！普通に言った！堂々と言った！

「ダメです」

姉貴は笑顔で言う。

笑顔が怖い。

「何故だ」

九重が眉をしかめて訊く。

「私が陸人さんを愛しているからです」

僕自分の家族が恥ずかしい人たちだと今やっと分かった！

「わたしだって愛しているぞ！」

九重も負けじと言う。

どういう状況だ。

実の姉と今日知り合った変な女に目の前で愛の大きさをくらべをされている。

なんだこれ。

「あたしはかざ姉を愛してます！」

「お前は黙れ！！！」

氷月が喋るとろくなことがないと思う。

「お母さんも愛してます！」

「頼むから黙ってて下さい！お願いします！」

「くが兄も男としてはかなり好きな方……」

「誰かー！妹を黙らせるにはどうしたらいいのか教えてー！！！」

「縛り上げて口をガムテープなどで塞げば良いのだ」

「そういうことを聞いてんじゃなくてね！！！」

怖いよ、九重さん。妹を縛り上げるとか。兄がすることじゃないよね。

「ね、ね！お姉さん！今日は家に泊まってくの？泊まってくよね！！？」

氷月は九重に迫るように言う。

「いいのか？」

九重はそれに対して嬉しそうに微笑む、という反応をした。

鼻血を出している氷月に若干引いてはいるようだ。（当たり前だ。

そこをスルーされてしまうのもどうかと思う）

「良いよね！かざ姉！」

「ええ、まあ。良いですよ」

基本小さいことは気にしない人たちなので（僕もそうだが）ある程度予想はしていたのだが、こつもあっさりとした承を得られるとは驚いた。

「じゃ！じゃさ！お姉さんあたしといかがわしいこ」

「お黙りなさい」

姉貴の笑顔の抑止で、氷月はびたりと喋ることを止めた。

僕と同じように、氷月の怖い者も恐らく姉貴なのだろう。

「陸人さん。千切さんを泊めるのは構いませんけど、その代わり

姉貴はにっこりと笑って、

「姉さんと一緒に寝ましょう」

「丁重にお断りさせていただきたい……！」

空海さん家の夜

と、いうわけで。

九重ここのえが家に泊まることになった。

泊まるということは、必然夕飯も一緒ということになる。

我が家の食事は当番制なので今日の食事当番である僕が夕飯を作った。

調理中ずっと後ろで九重が歓声をあげながら僕の横に張り付いていて、その九重に氷月が張り付いてでへでへ気持ち悪い声を出して、はつきり言ってかなり邪魔だった。

今日の献立はクリームコロッケに、エビフライ、海鮮サラダ、コンソメスープ、白米。デザートに青森産の林檎（氷月の要望でウサギ型）である。

まあ、普通。

帰って来た時間が遅かったということもあり（それと姉貴に説教をくらっていたということもある）、食べ始めたのは九時だった。

ちなみに親父は今日は仕事で帰って来られないそうだ。

何気に気になっていた九重の反応は、

「美味だな！うむ！これほど美味しい物を食べたのは久しぶりかもしれない
ん！！！」

コロッケを口に入れて、頬にクリームをつけながら絶賛してくれた。目をキラキラさせて言う。

可愛い。

「陸人は料理も出来るのか！完璧だな！完璧な男だ！流石わたしが惚れただけある男だ！」

ベタ褒めだった。

そこまで大それたことはしていないのだが、家族以外の人に褒められると素直に嬉しい。

「タルタルソースの味付けが気に入らない」

氷月は白米を口に運びながら文句を言う。
うるせえ。

少しは九重を見習え。

というかタルタルソースくらい僕の好みに合わせろ。

「陸人さん、サラダのドレッシングにごま油が入っていないようなのだけど…」

先程とは違ってパジャマを着ている姉貴が静かに言う。

九重とは対照的に文句の多いやつらだった。

僕は海鮮サラダにごま油をかけて、氷月の皿からコロッケを一個奪った。

「うわ、サイテー！」

氷月が何かわめいているが気にしない。

タルタルソースごときで文句をいうお前が悪い。

姉貴には逆らわないが。

「仲が良いな！貴様らは。兄妹仲が良いのは良いことだ！」

九重が何を見てそう言ったのかは分からないが、とりあえず眼球を僕のものと同交換してもらいたい。

貴方には一体僕らがどういう風に見えるんですか。

僕は氷月から取り上げたコロッケを食べながら（氷月の妨害など相手にもならない）九重を眺めて食事を進めた。

食事を終え、四人で一人三つ林檎を食べ（氷月に二つほどとられて、食後の片付けにはいる）。

僕が皿洗いをしている間、九重は氷月とテレビゲームをやっていた。有名なファンタジー系のアクションゲームだ。

画面の中では、『2P HIDEUKI』と頭の上に浮かばせているマントの金髪女（職業魔術師）がごついモンスターにばかばかやられまくっていて、それを『1P KOKO』を頭上に浮かばせた大剣を持った男（職業剣士）が一生懸命アイテムを駆使して治療していた。

つまりコントローラーを不器用に操っている九重を氷月がうつとりと眺めていた。

「おい、氷月！大変だぞ！やられそうだぞ！？いいのか!？」

九重は慌てた様子で言う。

「うえへへ…うん…。そうだね、もうすぐレベルアップだあ…」

氷月は気持ち悪い笑みを浮かべながら適当に応じる。

ちなみに九重はゲームをやったことがないらしく、さっきやっとキヤラを操作できるようになったばかりなので、画面に集中するのにいっぱいいいっぱいで、隣で自分を見て鼻を伸ばしている氷月には気付いていないようだった。

「わたしはゲームをやるのは初めてだが、今がそんな状況じゃないことは分かるぞ！」

そうだろうな。

「うへへ…。そっか…分かるんだ…。おりこうさんだねえ…」

勝手な推測だが、あいつは多分今死んでも悔いはないんじゃないかな。

あれじゃあ、僕がコツコツと集めた回復系のアイテムは底を尽きてしまっただろうな、と思いつながら九重の苦戦しているようだが楽しそうなあの顔が見られたので良しとしようか。

僕は食器洗いを済ませて、姉貴に沸かしておいてもらった風呂に入ろうかと考えた。

一旦自分の部屋に戻って着替えを持って脱衣所へ向かう。

途中リビングにいる氷月と九重に先に風呂入るぞと告げて生返事を聞いて。

明後日からの期末試験に向けて風呂から出たら勉強でもしようかな、と思いつながら脱衣所の扉を開ける。

がらり。

「……………」

「……………」

「……………」

「え…と、」

お約束。

脱衣所には姉貴がいた。

素っ裸である。バスタオルも何も巻いていない。

右手には歯ブラシを握っている。

風呂で歯を磨いていたのだろう。

どうやら、今風呂からあがったところらしい。

体からはほこほこと湯気が立ち昇っている。

髪はしっとり濡れていて、妙な色気がある。

姉貴はしばらく固まって黙っていたが、やがてにつこりと微笑んで

両腕を広げた。

うわっ！

慌てて目を逸らす。

「ご、ごめん姉貴！」

僕は姉貴にくるりと背を向けて、言う。

「良いのよ。陸人さん。家族なのだから。そう…」

姉貴は続けて、

「一緒に入りたかったのなら早く言ってくれば良かったのに」

「ちげえよ！」

どうという思考回路をしているんだ！

我が姉ながら恐ろしい！知ってたけど！

「もう姉さんはあがっちゃいましたよ」

「ちげえって！」

まさかそのまま続けるとは。

僕の言葉は通じないのか。宇宙人なのか姉貴は。

まあそうだとしても不思議ではないが。

「恥ずかしがり屋さんね」

くすり、と笑って姉貴は言う。

「それもちげえよ！てか人の話を聞こう！頼むから昔っからこの子

は…みたいな感じで言わないで！」

と。

いう訳で僕はなんか別の意味で恐ろしいことを言っている姉貴にもう一度謝って脱衣所を出た。

死 死 死 死 死

「はあ……」

湯船につかりながら溜息をつく。

結局あの後、うへへへと言いながら床に額を打ち付け始めた馬鹿な妹を介抱してやり、先に風呂に入ってこいと言って九重と氷月を一緒に脱衣所に放り込んだ。

氷月がどうしても言うので九重と一緒に風呂に入らせたのだが、案の定氷月は鼻血を出してぶっ倒れた。

九重に手伝ってもらい 「絶対に湯船から出てくるな」と九重に言って、氷月を風呂から連れ出した。ぶつちやけ緊張するどころの話ではなく、何回か本気で意識を失いかけた 氷月をあがらせた。

勿論氷月の裸なんて見ても何とも思わない（姉貴は別だが）。

姉貴と一緒にやっとこさ氷月を着替えさせたところで九重が心配そうな顔をして入ってきた。

湯上りの九重は頬がほんのり桃色に上気していて、髪の毛が濡れてうっすらきらきらしていた。更に姉貴の青色の水玉パジャマを着用していて氷月じゃなくても鼻血が出そうなくらい色つぽかった。

「だ、大丈夫か？」

「大丈夫だろ」

「問題ないわ」

僕と姉貴はそれぞれ言った。

氷月のことはあまり気にしなくても大丈夫だろう。

前に従妹の空海くくりが家に泊まりに来た時もこんな感じだった。九重はほっとしたように息をついた。

そりゃあいきなり人が鼻血出してぶっ倒れれば驚くに決まっている。幸せそうな顔でにへにへしてる氷月を姉貴がひよいと持ち上げた。僕でも苦勞したのに仮にも女である姉貴が軽々と持ち上げちゃうのを見るとやっぱり落ち込む。

「ちぎりん…かざ姉…陽火さん…くが兄…」

氷月が姉貴に抱えられながらもそもそくへへと何かを呟いていた。うわ言…？怖いんですけど。

すたすたと階段を上って氷月を部屋まで運びにいく姉貴の後ろ姿を見送ってから、やっとこさ風呂にありつけた。

なんか無駄に疲れた。

もう妹には十年くらい関わりたくないと思うくらい疲れた。（日常茶飯事だが）

そして風呂からあがるとぽかぽか温まった体でソファに沈む。十二時頃まで下らないラジオを聴きながら英語の単語を暗記していた。

それから自分の部屋に戻り、そういえば九重と姉貴はもう寝たのかな、とか考えながらベッドに潜った。

明日も学校だなあ、とか当たり前なことを思いながら目を閉じると、いつの間にか眠りにおちていた。

「陸人…。くがたん！」

「むっ…?」

すやすや眠っていた僕に誰かが声をかけてきていた。

まあ誰かといってもこの感じは九重しかないのだが。

「ああ、悪い起こしてしまったか」

九重は暗い部屋の中僕の顔を覗き込むようにしながら言った。

いや、起こしてしまったかって…。

わざとでしょ、って言いたい。

「わざとだろ」

言ってみる。

「お願いがあるのだが…」
スルーされた。

分かってたけど。

「何？」

体を起こして目をこすりながら言う。

「テレビが…」

「は？」

もごもごという九重を見上げて訊き返したところで。

おう…。

この状況は…。

今更になって気が付く。

部屋は夜の闇に包まれていて明かりといえば窓から差し込む月光だけ。

九重はパジャマ姿で、支えを失った胸部がたゆんたゆんしている。

しかも九重は顔が若干赤い。

目が完全に覚めた。

僕は九重から視線を逸らす。

「見たいテレビがあるのだ…」

「は、はあ…？この時間に？」

「し…深夜アニメ…だから…」

「あん？なんて？」

「見たいテレビは深夜アニメなんだ」

ベッドの脇の目覚まし時計を見ると短針が丁度二と三の間に差し掛かるところだった。

「ほう？意外だな」

「い、意外か…」

「うん。それで？」

「一緒に見ないか」

「なんで!？」

それは意味が分からないぞ！？

寂しがり屋なの！？深夜アニメと一緒に見る人がいないと死ぬの！？

「他人の家で一人で深夜アニメを見るなんて…勇気があるだろう…」

？」

九重は恥ずかしそうに言う。

そういうもんか？

まあ分からなくもないかな、と思う。

「一緒に見ないか？」

九重が上目づかいで恥ずかしそうに訊いてくる。

「毎週欠かさず見ていたんだ…」

ああ。僕は意志が弱いな。

こんな可愛い顔されたら断れないじゃないか。

「はいはい」

僕は溜息をついて、ベッドから降りた。

そして、意味も何も分からない連続アニメを九重と一緒に三十分間見続けた。

空海さん家の二兄妹

翌日。七月二日。

午前八時。

僕はやかましく鳴り響く目覚まし時計を必要以上に力強く叩いて止めた。

毎日こんな感じの止め方をしているでよく壊れないな、とか思うが、今日はひとときわ強く叩いた。

眠い。

中途半端な時間に起きたからだ…。

僕はのっそりとベッドから出て制服に着替えると教科書が殆ど入っていない軽い鞆を持ち上げて部屋の外開き仕様の扉を開けると。

ごん、と音がして同時に「いてっ！」という声が出た。

この声は…。

「何、してんの。氷月」

扉の内から顔を出して廊下を見ると、正座をして頭を押さえる氷月がいた。

まあ当然僕には何がしたいのかわからない。

なんだこいつは。

「くが兄〜っ」

氷月は何故か涙目で言った。

いや、多分頭打ったからだと思うけどね？

しかし不可抗力ですよ。

普通部屋の前で妹が正座してるなんて思わないじゃん。

「何？なんなの？」

ほんとに。

なんなの。なんで泣いてんの。

何気にマジ泣きっぱいし。

「そんなに痛かったか？ごめんな」

僕の言葉に氷月はふるふると首を振った。

それから涙目のまま、

「ごめん」

と、何故か謝った。

いや、泣きながら謝られたら僕が鬼畜みたいじゃん！

てかなんで謝れてんの僕！？

「お誕生日…おめでとつ…」

「うん？」

「忘れててごめんね…」

氷月は申し訳なさそうに言った。

「あ…」

そういえば昨日は氷月におめでとつを言われてなかった気がする。

親父は似合わないデコメを送ってきたけど。

「別にいいよ」

「良くないよ！」

怒られた。

ええ…。

「今日じゃケーキとか今更な感じして食べないじゃん…」

おい。

中途半端な優しさだな。

「生まれた日忘れられるとかチョー嫌だよ…」

氷月はしゅんとした感じに言う。

ふうん…。

そんなこと気にしてくれてるのか。

僕としては誕生日くらいクリスマスとか正月に比べれば全然たいしたことないイベントだなーと思うので、忘れられたことなど気にしないのだが。

そりゃ、祝ってもらったほうが嬉しいに決まってるけどな。

前にも言ったが、家の血族は細かいことを気にしない主義の人が多いからな。僕を含めて。

「とにかく！誕生日おめでとう。くが兄！」

「おう。ありがとう」

死 死 死 死 死

朝食を食べにリビングに行くといきなり姉貴に抱きつかれた。

「な、なな何！？」

朝から下着姿の姉貴に少し戸惑いながら言つと、

「ごめんなさい陸人さん！姉さん陸人さんの誕生日忘れてました！姉貴もかい。」

確かに姉貴からもおめでとうは言われていないが。

考えてみれば家族で誕生日を覚えていてくれたのは親父だけかもしれない。

母さんからは何の連絡もないし。

「お誕生日おめでとう」

「えつと。ありがとう」

「千切さんに聞いて焦りました」

「九重がいなかったら僕は祝ってもらえなかったのか」

「恥ずかしながら…」

うん。正直な人ですね。

思い出す気はなかったらしい。

「陸人、朝ご飯出来てるぞ」

九重が椅子を引いて言った。

朝から美しい人だ。

今気づいたけれど、九重は化粧とかしないんだな。

素でそれだけ綺麗とか。

頑張ってる女の子たちに恨まれんじゃねえの？

「風雲かざくもが作ってくれたんだ！」

「今日の食事当番は姉貴か」

「フレンチトーストよ」

「美味いぞ！空海家はみんな料理が得意なのだな！」

「そうとも言えないな」

「そうとも言えないですよ」

九重の言葉に同時に言う僕と姉貴。

「氷月の食事当番は月二回だ」

「卵かけご飯かお茶漬けね」

同じように溜息をついて僕と姉貴は言う。

「ご、ごめん…」

氷月が僕の後ろで小さく言った。

運動神経だけは良いんだけどなあ、こいつは。

僕は苦笑して、九重に引いてもらった椅子に座る。

ぼそぼそと流れているニユースを流し見して、フレンチトーストを食べる。

ん。美味しい。丁度いい甘さ加減だ。

「かざ姉もうちよつと甘くしてもいいんじゃない？」

同じくフレンチトーストを食べていた氷月がなんか言っていた。

文句の多いやつだよな。

「そう」

笑顔の姉貴に蜂蜜をビンいっぱいにかけて悲鳴をあげる氷月をばかめ、と思いつつ見ていると、隣で九重がくつくつと笑っていた。

「愉快だな」

相変わらず美しい笑顔だ。

姉貴は蜂蜜をかける手を止め、氷月はフォークを落としていた。

直に見ると女だろうがなんだろうが九重の笑顔には惚れてしまっらしい。

何故か僕が嬉しい気持ちになった。

死 死 死 死

腕にしがみついてくる九重を何とか振りほどいて僕は学校に向かった。

「はよー。くが」

「おはよ。那ななき風」

僕が教室に入ったところを一番最初に気付いて声をかけてきたのは

那のくま風乃熊。

腐れ縁の友である。

小学校から一緒の学校だ。

「なあ、くが」

「何？那風」

「くががめつちや美人つれて歩いてたつて目撃証げ…」

「知らんな」

「おい」

ナニイツチャッテンノ？ナナギクン。

「あ、こんな話知ってるか？ある日Aさんが放課後の校舎で屋上に続く階段の段数を数えてたらしいんだが…」

「登る時と降りる時で段数が違うんだろ！？知ってるよ！」

「登った時に五段目にいたアイアイが降りる時には三段目にいたらしいんだ」

「動いたんじゃないやねえの！？ってかなんでアイアイ！？」

「おお。なかなかのツツコミだな。流石那風だ。きつと九重に気に入られるよ」

話をはぐらかさそうと言ってみたつまらんギャグだったが、思ったよりも激しいツツコミが返ってきた。

こいつ好きだわー。

勿論友達として。

「九重つて誰だよ」

那風の言葉はスルーしようか。

キーンコーンカーンコーン

授業開始のチャイムが鳴った。

同時に後ろから担任の教師の須田野すたの（三十二歳既婚男性教師。下の名前は覚えていない）が入ってきた。

時間にきつちりしている人だ。

「空海。那凧。早よ座れ。なかなか邪魔だぞ」

須田野が出席簿で僕と那凧の頭を軽く叩く。

「待って待って先生！ほら、まだなんとなく音鳴ってるじゃん？
セーフセーフ！！」

「分かったから。早く座れ」

那凧の言葉に苦笑しながらどう見ても二十代にしか見えない須田野は言った。

「はい！」

「すみません」

僕と那凧はそれぞれ言って席についた。

須田野は教卓につくと、出席を取り始めた。

死 死 死 死 死

昼休み。

僕は教室で那凧と昼食をとっていた。

「今日の弁当は風雲さんか」

那凧が僕の弁当の中身を覗きながら言う。

「ついに僕の弁当が誰の手製か分かるようになったか！」

驚いた。ずっと一緒にいるとこういうことがあるのか。
時間とは恐ろしいものだ。

「いや、普通に分かるでしょ。くがは氷月ちゃんが食事当番の時弁当持ってこないし。自分で作る時はもっと普通っぽいヤツだし」

那凧は苦笑して言った。

そうか。確かにな。

慣れ過ぎてて気付かなかった。

那凧に言われて自分の弁当を見る。

ハート型のハンバーグにたこさんウィンナー、星型の玉子焼き、ミニトマトと、カニカマ。

そして。

ご飯に海苔でかかれた『KUGA? HITO』。

これを自分で作ってたら引くもんな。

こんなんつくるのは姉貴しかない。

これに慣れてたんだな、と思うと恥ずかしい気持ちになった。

「相変わらずすごいな、風雲さん」

那凧が苦笑いで言う。

「あんな綺麗な人が姉ちゃんなんて羨ましいね。これは少し嫌だけど」

「綺麗か？」

「美人じゃん」

「んー…。美人に見えなくもないが…」

家族だからか、すごい美人だ！とかは思わない。

けれど。

周りから見れば、すごい美人に見えるのかな。

どっちにしても九重を見てしまえば感性は変わるだろう。

そんなことを考えていたら、

「くがも風雲さんに似てるから格好良いほうなんだろうな」

那凧は自然に言った。

「似てるか？」

「は？そっくりだろ」

何を言ってるんだといった感じに那凧は言った。

九重も同じことを言っていたな。

そんなに似てる？

僕は星型の玉子焼きを口に入れる。

ん。甘いやつだ。

那風がカレーパンを頬張っているのを見てから、窓の外に目を向けた。

風が入ってくる窓際のこの席は気持ちがいい。

僕たちの教室は一階にある。

校庭がよく見える位置だ。

今は運動部の人たちがこのくそ暑い中で精を出している。

野球部の声をぼんやりと聞いていると。

声に混じって低い地鳴りのようなごうごうという音が聞こえてきた。

「ん？」

校庭側の校門の向こうから何か土埃を巻き上げながら近づいてくるのが見えた。

「なにあれ？」

那風も気が付いたらしく、訝しげに言った。

何かは猛スピードで近づいてきていた。

ガリガリガリっという音を響かせて校庭のあらゆるところを削りながら近づいてきたのは一台の車だった。

赤いスポーツカー。

ものすごい速さで平然と高校に乱入してきたスポーツカーには、見覚えがあった。

野球部とサッカー部が悲鳴をあげて転がるようにスポーツカーを避ける。

「な、なんで……？」

僕は驚いて口をあんぐりと開ける。

キキキキーと、耳を劈くような音をあげて、スポーツカーは半回転しながら急停止した。

砂埃が一面に舞う。

そして、スポーツカーの助手席の扉が開く。

出てきたのは金髪碧眼、白い肌で、赤いドレスを着た超絶美人。

つまり九重千切。

「陸人！」

「は！？なに、何?!」

九重は僕を見るなり叫んだ。
なんなんだ？

いつの間にか教室の人たちの視線は全て九重に集中していた。
教室の人だけではない。

上階からもざわめきが聞こえるし、運動部の人達も啞然として、九重を見ている。

「陸人！行くぞ!!」

九重は続けて叫ぶ。

「ちよ、ちよつと待て、九重！行ってくてどこに」

「いいから来い！今は説明してられない！」

九重は、切羽詰まっているような様子で叫ぶ。

どうしたんだ？

訳が分からず戸惑っていると、スポーツカーの運転席が開いた。
そして。

姉貴が出てきた。

やっぱな。

あのスポーツカーは姉貴のか。

姉貴はノースリーブに短パンという涼しそうな格好で、真剣な顔でこちらに向かってきた。

「陸人さん、行きましょう」

淡々とそう言うと、僕の制服の胸ぐらをつかんで、窓から引き摺り出した。

え？ええ!？

僕はそのままスポーツカーの後部座席に放り入れられた。

長女 空海風雲

僕は文句を言う間もなく、上履きのまま車に乗せられて、

「九重このえつて、あの美人さんか……」

呆けた顔で言う那凧ななぎの声を聞いた。

それから九重と姉貴も車に乗り込み、僕が口を開く前に車を急発進させた。

砂埃を巻き上げて校庭を出るスポーツカー。

これ、通報されないかな？

そんなことを少し思った。

「つてか！なに？これ！？なんで拉致されたの僕！？」

「千切ちぎりさんの様子が……」

姉貴は助手席の九重に目を向けて言う。

九重は眉をひそめて、

「昨日の“狭間”」

静かに言った。

「管理人が、近付いてきている」

「てるてる坊主が、か？」

訊くと、

「違う」

九重は首を振って否定した。

「昨日のやつではない」

「でも管理人つて……」

「わたしは嘘をついた」

「は？」

九重は目を伏せる。

「管理人は何体もいるのか、という問いに、わたしは分からないと答えた」

スポーツカーは目的地のないまま走る。

姉貴は話を聞いているのかいないのか、静かにハンドルを握り続け
ていた。

「あれは嘘だ。本当は知っている」

「……」

「あそこの管理人はでかいてるてる坊主を抜いて、あと六体いる」

「六体？」

「しかもその六体は人の形を成しているのだ」

全部てるてる坊主ってわけじゃあ、ないのか。

「でつかいのとは違って、人型の管理人は好戦的なんだ」

「人格もあるのか？」

「……こういうところが冷静な者は助かるな」

僕の質問に、九重は軽く笑った。

「それは微妙だな。無いように見えるが、何かを感じているように

見えることもしばしば、といった感じか」

「んで、それが何？」

「それは、てるてる坊主よりも動きが早い」

「うん？」

「それが今わたしたちの元へ近付いてきている」

「なんで？」

「分からない」

九重は美しい顔に影を落として言う。

「六体の管理人は、あの世界に入り込んだ者を攻撃して、あの世に
連れて行く。あの世界に入って助かる者が少ないと言った理由はそ
の管理人から逃れることが難しいからだ。そして陸人くがひとは、あの世界
に入った」

九重は振り向いて、

「本気で、驚いたよ」

言った。

「前にも言ったがあそこには、普通入れないんだ。わたしは別だが。

だから、陸人が入ってしまったのを見た時本気で、驚いた」
そうだったのか。

全然驚いていたようには見えなかったけど。

「わたしは内心でかなり焦った。そして、わたしの体質が原因なのだと、仮説をたてた」

「仮説だったのか」

僕の問いに九重はこくりと頷いた。

「何故なら、今までわたしの傍にいたから、という理由で“狭間”に入った者を見たことがなかったからだ。そこで、さらに仮説をたててみると、陸人。貴様は“狭間”に入りやすい体質なのかもしれない」

真剣な顔で九重は言う。

「あくまで、入りやすいだが。その可能性は無いとも言いきれんのだ」

「おお…。すげえな。僕、漫画の主人公みたいだな」

「陸人」

「ごめん」

怒られた。

空気が読めていなかったらしい。

反省しよう。

「わたしには管理人が近付いて来た時に、気配で分かるんだが…。陸人は分からないだろう？」

「分かりません！」

「だろうな、見れば分かる」

九重は静かに言って、ちらりと僕の背後に視線を遣った。

「しかし先程の仮説が本当ならば、陸人はいきなり“狭間”に入ってしまうかもしれん、ということだ」

「それって…」

「そう、管理人に見つかれば陸人は殺される。間違いなく。管理人に敵う者などいない」

九重はきつぱりと、そう言った。

九重に真剣な目で見つめられるとぞくりとする。

「私には良く分からないけれど、千切さんに真剣な顔で陸人さんが死ぬと言われたから」

姉貴は前方を睨むようにしながら言った。

いつもにつこりしている姉貴にしては珍しいことだった。

「逃れるためには、“狭間”に入らないようにしなければならぬんだ」

二人の真剣さが伝わってきて、これが冗談とかドツキリとかではないらしいことが分かった。

ていうか、今日姉貴大学休みだったんだ…。

「で、現在逃走中、と？」

九重は静かに頷いて前を向く。

「結構、近くに來ているんだ。管理人は…」
焦った感じの九重。

「姉貴、どこ向かってんの？」

「後ろからきているらしいので、前に」

つまり行先は決まってるらしい。

ただ真つ直ぐ一般道路を走り続ける。

「暑いですし、海にでも行きましようか」

姉貴が微かに微笑んで言った。

「そうだなー。でも海はしょっぱいから苦手だなー。川がいい」

僕も窓の外を眺めながら微笑んで言った。

学校サボって川とか（笑）

外には何も無い平野が見えた。

「そんなこと言ってる場合じゃ」

九重は言いかけて、止めた。

「…。本当に、貴様らは良く似ている」

そう言って、淡く微笑む九重。

美しかった。

「問題ないよ」

僕と姉貴は同時に言った。

九重はそれを見て、さらに微笑んだ。
と。

そこに。

前の車が止まった。

信号が赤になったからだ。

当たり前である。

一般道路なんだから信号はあるし、信号なのだから色が変わらない
と役目を果たすことが出来ない。

当たり前なのだが、今は一大事だ。

「や、やばい。やばいやばいやばいやばい！来ているぞ！管理人が
！後ろ…っ！」

九重が声をあげる。

かなりヤバそうだ。

ええっ…。

どうしよう？この状況。

と。

その時。

「っち…！」

姉貴が舌打ちしたのを、僕は久々に聞いた。

姉貴は後ろの車にぶつかりそうなほどの距離までバックして、タイ
ヤの音を高らかにたてて反対車線へと飛び出した。

信号は赤なので、反対車線は車はなかったが曲がってくる車のこと
は一切考えていないのではないだろうか。

そんなことを思っていると姉貴は、

「しがみついていないと頭打ちますよ」

と、言って、そのまま反対車線どころかガードレールも越えた。

車が宙に浮いた。

浮遊感が襲ってくる。

僕は車に放り込まれたときにシートベルトを締めるのを忘れていたので、派手に後頭部を強打した。

「いったあ……」

がったん、という音と共に着地した車と僕。

後頭部をさする。

たんこぶ出来たし。

「私は言いましたよ。しがみついてなさい、と」

姉貴は平然とした口調で言った。

おっかねえな、おい。

九重もこれには驚いたようで、胸に手をあてて呆然としている。

姉貴は九重に軽く謝って、アクセルを踏み込む。

僕には謝らないのにな!

男尊女卑だ……。

あれ?女尊男卑か?

もう。頭打ったせいでどっちか分からなくなったじゃないか。

また馬鹿になった気分だ。

「馬鹿を人の所為にするんじゃないやありません」

「心を読まれた!?九重と同類か!?!」

何でも出来るんですね、姐さん。

姉貴は先程窓から見えていた平野をスピード違反とかを一切無視して滑走していた。

これでなんとかやり過ごせるのでは、と思ったのだが。

ぶしゅつづつ

と。

音をたてて車は停止した。

え?

「っち……。やっぱダメか……」

姉貴が悔しそうに言った。

くるりと振り返って、言いにくそうに、

「ガソリン、切れちゃいました」

と。言った。

え？

「ええええ！？」

びっくりだ。

どうすんだよ、もう。

僕はイマイチ緊張感に欠けることを考えながら、九重を見た。

九重は

震えていた。

美しい顔に恐怖の影を落として。

「来た…。来て、しまった…」

九重の怯え方を見て、尋常じゃないな、と思う。

いつそ走るか。

九重を申し訳なさそうに見て、姉貴は口を開く。

「千切さ」

が。

その声が最後まで僕と九重に届くことは無く。

姉貴は姿を消した。

同時に現れたのは、一面の花畑と、時計台。

前方には小川。

“狭間”だった。

“狭間”と座標

泣いてる女性がいました。

見ると、それは美しい女性でした。

私は彼女に近付いて声をかけます。

「こんなところで何で泣いてるの？」

彼女は私をみると、ゆっくりと立ち上がって、

「許せないんです……」

静かにそう言いました。

「許せない？」

ええ、と彼女は頷いて、

傍にあつた真っ赤なスポーツカーに激しい蹴りを入れまし
た。

スポーツカーの側面は無惨にもベッコリと凹んで、ドアが歪み、ガラスが割れます。

しかし私は驚きません。

何故なら彼女がこういった行動をとるのはいつものことだからです。

「陸人くわがひとさんを守れなかった自分が至極腹立たしい！」

彼女 空海風雲そらみみかざくもは言いました。

本当に腹立たしそうに。

「何か、あつたの？」

私が問うと、彼女は赤くした目をキリ、と吊り上げて、

「また“狭間”に入ってしまったのですよ。」

あの日と同じように。

まあ、もつとも陸人さんは……」

続けて、

「……あそこが、どれだけ恐ろしい場所かも、覚えていないようだけれど……」

静かに、悔しそうに、彼女は言いました。

私は彼女に笑いかけます。

「大丈夫。くが兄だもん。かざ姉の弟だよ？」

かざ姉はそんな私を見て、優しく笑いました。

「あの日のように、待っていきましょうか」

そう言うと、ひょいとスポーツカーの屋根に飛び乗って、座り込みました。

私は凹んだスポーツカーを哀れに思いながら横目でみて、同じように車の上に乗ってかざ姉の隣に座ります。

風は夏の湿気を含みながら、淡い茜色に染まった雲を流していきま

す。

水色の薄い月は、雲に隠れたり顔を覗かせたりしています。

私とかざ姉の名前の由来でもある景色を見て、私は心が躍ります。

今日は此処で、くが兄の帰りを可愛いかざ姉と待つことにしまし

死 死 死 死 死

九重このえは、僕の手をとって走り出した。

「もうここまで来てしまったのだから仕方がない！逃げることだけを考えるぞ！」

九重は言って、時計台へと向かって走る。

僕は九重に引つ張られて後を追う。

周りを見回したところ、辺りには異様に明るい空と、花畑、でっかい時計台と、小川だけ。

でっかいてるてる坊主も、僕達以外の人間も見当たらない。しかし。

前に来た時よりも、嫌な感じがする。

何かに見張られているような…。

「今回は時計台の屋根じゃ、ねえのな」

なんとなく思っ、言ってみた。

「あの平野の座標が時計台じゃなかったからな」

九重は振り向かず答える。

「座標？」

九重の流れる美しい金髪を見ながら訊く。

「碁盤が二枚重なっているとして、碁盤の目が合わさった場所が此処と私たちがいた世界を表したものだと思える」

なるほど…？

わかんねえ。

ま、いいか。

「風雲は…大丈夫だろうか」

九重が心配そうに言った。

「大丈夫でしょ、それは。姉貴がピンチになったりすることはねえだろうし」

僕は確信をもって言う。

「…随分と、信頼しているのだな」

九重がちらりと僕をみて言った。

「ん。僕、姉ちゃん大好きだしな」

これは本当。

何気にシスコンだったり。

なんだかんだ言っ、尊敬すべきところがたくさんある。

「私よりもか!？」

九重は足を止めて言う。

うお。いきなり止まんなし！

危うくつつ込むところだったろ！

幸せなおもいに浸るところだったぞ。

「私よりもか！？」

そして二度目の確認、という。

九重の顔は真剣だった。

「ううん…？」

答えにくい質問である。

ここで姉貴つて答えたら重度のシスコンっぽいし、九重つて答えるのもちよつと…。

忘れてるかもしれないけど、九重は僕からすれば出会って二回目の超絶美人お姉さんな訳である。

知っていることといえば、僕に一目惚れした(らしい)ということと、不思議な体質だということ、深夜の連続アニメが好きで、笑顔が異様に美しいということくらいだ。

そんな人に姉貴よりも好きですって…。

言えないよなあ…。

あとで姉貴にバレたら怒られるだろうし。

「陸人！」

九重は僕の顔を覗き込むように言った。

うわ、近くで見ても本当に綺麗だな。

本当に人間か？こいつ。

「いや…ね？うん。どっちも同じくらい好き、というか…。姉貴の好きはそういう好きじゃなくて家族として尊敬してて…ってことで好きなんであり…。ね？」

やましいことを言っている訳でもないのにしどろもどろになる僕と。

そこで。

九重が思い切り僕に体当たりしてきた。

…え？

別に踏ん張っていた訳でもない僕はあっさりと九重に押し倒される。下が花畑だったおかげで、頭を打つてもそこまで痛くはなかった。反射的に瞑ってしまった目を開くと、そこには美しい白い肌があった。

「お、おい？」

九重は僕の上に覆いかぶさるようにしている。え？なにこの状況？

視線を泳がせながら、僕は顔を引きつらせた。どうしたらいいのかわからない。

「陸人はやつぱり…わたしが惚れた男だよ」
そんなことを言う。

淡い、微笑みを浮かべて。

「だから、守らなければ」

そう言つて、九重はゆっくりと起き上がる。赤いドレスの裾を翻し。

見ると。

僕の足元に。

さっきまで僕が立っていた場所に。

日本刀が突き刺さっていた。

刀身が光を反射して煌めいている。

漫画や、テレビ、博物館でしか見たことのないような、日本刀。人を切り付ければ、死んでしまいそうな、日本刀。

本物の、日本刀。

「は…？」

啞然としてしまう。

もしもあのままあそこに立っていたら、僕は死んでいた。九重が体当たりをしてくれなければ。

「あれがもう一つの管理人だ。陸人」

九重はそれを見詰めて淡々と言う。

ああ、そういうことか。

僕は、見つけたんだ。

“狭間”の管理人に。

見つけて、しまったのだ。

見つければ絶対に殺されるという存在に。

初恋の人

そこにいたのは、一人の少女だった。

明らかに、僕より年下の、少女。

黒い短髪に、卵色の肌。白いユニツクの上から、黒のポンチョを纏っている。

下には白のハーフパンツ。

一見何の変哲もない、小学校高学年から中学生辺りに見える少女。

しかしおかしな点が一つ。

少女の、目。

少女の、眼。

少女の、瞳。

それは、赤い瞳だった。

いや、それだけ聞くとカラーコンタクトか何かだろうと思うだろうが、本当に、真っ赤なのだ。

信じられないくらい。

眼球全体が紅い。

全体ということは、

つまり、白い部分が見当たらない。

あり得ない、くらい。

充血しているような、赤。

真っ赤。真紅。

普通のモノでは ないだろう。

少女はちらりと僕に目を向けた。

紅い瞳を。

背中に冷たいものが駆け上がっていくような感覚がした。

あの眼は、恐ろしい。

人間のモノではないと、はっきり分かる。

そんなものに、見詰められればと。

そんな時。

少女が僕と目を合わせた数秒の間に。

九重が、少女との間をいつきにつめた。

少女が驚いたのも関係なしに、九重は少女の腹部に手加減なく蹴りをいれた。

少女は、数メートル先まで飛んでいき、カラフルな花の中へと沈むように落ちた。

「え？ええ？」

九重は驚愕する僕をお構いなしに引つ張る。

「管理人だ。あれくらい、何ともないだろう」

九重は言って、走り出す。

「さつき言ってたやつか……」

僕が尋ねると、九重は無言で頷いた。

時計台に着くと、黒い木製の扉を開けて中に入る。

思ったよりも明るい。

外よりは薄暗いが。

恐らく青を基調としたあのステンドグラスが理由だろう。

九重は僕の隣で外を窺いながら髪を一つに束ねていた。

「陸人は、わたしの傍を離れるな。そして」

外を窺ったまま、

「わたしに何かあっても動じるな」

静かに言った。

「何かって」

嫌な予感が、した。

九重に、言葉の意味を尋ねようとしたところで。

少女はやって来た。

決して脆くもろはないはずの木の扉を、蹴破って。

「おおう！？」

びつくりだ。

こんな小柄な子なのに。

大きな音をたてて、木の扉が倒れる。

とんとんと、跳ねるように入ってきた少女は、くるりと首を回して、九重を視界にとらえた。

そして、ポンチョの下からナイフを取り出す。

何つーとこに何つーモン入れてんだこいつは！！！！

びつくりどころの話ではないだろう。

それを九重に向けて、当然のような感じで放つ。

よいこのみんなはマネしないでね！

って感じた！

お願いだから常識を弁えた子に育ってくれ！

しかし九重は、平然とナイフを受け止めた。

そしてそのナイフを逆手に持ち、少女を静かに見据える。

本当に、何の。

何の、冗談なんだろうか。

非現実的な出来事が目の前で起こっていること。

異様な状況だ。

小さいことは気にしないけれど。

これは、小さいことには、入らない。

ナイフを仕込んだ赤眼少女と、それを冷静に対処する九重。

二人は、一体何者なんだろうか。

何も出来ずに狼狽える（あまり狼狽はしていないが）僕は、はたから見れば完全に九重のお荷物だろう。

実際にもそうなのだが。

無表情の少女は静かに九重を睨み、九重は緊張した感じの空気を纏って、少女から目を離さない。

と。いきなり、少女は三メートルくらい離れていたのにもかかわら

ず、僕らの背後に現れる。

「おうっ！！！」

全然見えなかった。

いつの間に。

赤眼少女はポンチョの下から新たなナイフを取り出し、僕に向けて放つ。

当然、人並みの運動神経しか持ち合わせていない僕は不意打ちに近いそんな攻撃を避けられるはずもなく。

ナイフは僕の頬をかすって、向こうの壁に重い音をたてて突き刺さった。

九重に後ろから襟を引つ張ってもらっていなかったらもろ顔面に刺さっていたかもしれない。

ちくちく痛む頬から、じんわりと血が滲み始める。

しかし、それを気にする暇はない。

後ろから引つ張られ、しりもちをついた状態の僕に、少女は容赦なく攻撃してきた。

ポンチョの下から、今度はアイスピックを取り出す。

「だから…何っーモン入れてんだよ！！！」

思わずツツこんでしまった。

「っち…！わたしから陸人にターゲットを切り替えたか！！！」

九重は舌打ち混じりにそう言っつて、僕と赤眼少女の間に飛び込む。

飛んできたアイスピックの軌道を、手にしたナイフで器用に逸らす
が、逸れたナイフは九重の美しい白い腕をかする。

「九重！！！」

「言っただろう。わたしに何があっても動じるな、と！」

九重は赤眼少女から目を離さずに強く言う。

「すげえ格好良いが、んなこと言ってる場合じゃねえ。」

「さて、それじゃあ！」

「安心しろ陸人！わたしは何があってもお前を守るから！」

九重はなおも格好良い台詞を言う。

やめるよ。

そういうこと、言うなよ。

嫌な予感が、するんだよ。

そんな時、九重にそんなこと言われたら、変なこと想像しちまうじやんか。

まるで九重に、

死亡フラグがたつてくみたいじゃん。

死なせたく、ねえぞ。

初めて好きになれた、女なんだから!!!

「何も、考えなくていい」

九重は言っつて、赤眼少女の放ってくる刃物の類をいなし続ける。

足や、腕や、肩や、腹を傷つけながら。

僕は立ち上がつて、落ちてるナイフを拾う。

「ベタな台詞を、言いますが…」

九重の美しい金髪を見て、苦笑いを浮かべる。

そして、自分でも恥ずかしい台詞を、口にする。

「僕は、ここから戻ったら好きな人に告白しよう…と思わなくもなくなかない」

どっちだよ。

全く、小心者だよな、僕。

ぎこちない感じにナイフを構えて、赤眼の少女に目を向ける。

九重の奥にいる赤眼少女は。

僕と目が合うと、無表情だった顔を歪ませて。

にやりと、笑った。

「陸人!!!」

九重の叫びに、いつの間にか少女が消えていることに気が付いた。

さらに、九重が目を見開いて、僕の後ろを見ていることに気付く。
振り向くと、赤眼の少女が僕のすぐ傍で、日本刀を振り上げていた。
「!!!!!!!!!!?」

慌てて半歩下がるも間に合わず。

僕の胸から腹部にかけてを、日本刀が浅く切り裂いた。

「陸人!!!!」

九重の叫びが、聞こえてくる。

あの日本刀、やっぱ本物だったんだ。

僕はそんなことを思いながら、ビリビリになったうえに赤く染まっ
てしまった夏服のシャツに目をやる。

「大丈夫か！陸人!!!!」

小さいことは、気にしない。

九重が僕の前に立つ。

「大丈夫だいじょぶ」

僕はすきすきする腹を片手で押さえて頼りない止血をしながら答える。

こんなの、なんてことないよ、九重。

小さいことは、気にならないんだ。

「小さいことって…」

「小さいこと」

君を守るなんて、たいそうなことは言えないけれど。

自分の身は、自分の身だから、九重に守ってもらうなんてことはし
ないさ。

ま、自分の身は自分で守る、なんて出来る自信もないけれど。

僕がどうなってしまうかなんて、小さいことだ。

ただ、九重は僕のことを気にしないでいてほしい。

僕の中では

僕<九重

なのだから。

僕のことなんて、小さいことなんだよ。

大事な九重が傷つく様は、見たくないな。

だってこいつ、僕がいなければ傷つくことなんてないんだろうから。だから、今まで生きてこれて、僕に会いに来ることができたんだろう？

僕に、会いに来て、くれたんだろう？

その奇跡を、ここで失ったりするのは、嫌だ。

嫌なんだよ。

死亡

問題ない。

傷は浅い！

実は結構ふらふらきてる僕だが、そんなことはまあ、どうでもよくて。

赤眼の少女は、無表情に、僕を見ている。

気味の悪い、あの瞳で。

「陸人。本当に、大丈夫か？」

「大丈夫じゃないって言ったらここから出れるの？」

「……」

「大丈夫だよ。問題ない。死ぬことなんて、あり得ないから」

「そんなことは、言い切れない！」

九重は僕に目を向けて言う。

「あり得ないよ。僕が死ぬことは、絶対にありえない」

「????？」

堂々と言い放つ僕を疑問符を浮かべて見つめる九重。

ああ、ほんつと。

かわいいなあ。九重は。

九重の碧の瞳を見返して、思う。
と。

九重の後ろから赤眼少女がナイフを放ってきたのが見える。

僕は九重を右に引っ張って、ナイフから遠ざける。

「僕の運動神経は…あくまで人並みなんだけど…言い換えれば人並みの運動神経は持つてるんだよ」

握るナイフに力を込める。

その瞬間。

赤眼少女は目の前に現れた。

こわっ！

ポンチヨの下から取り出された電動鋸のこぎりの刃で、切りかかってくる。握っていたナイフで鋸の刃を受け止める。ぎりぎり刃の交わる音が鈍く響く。

てかこの子何でこんな力強い！？

電動鋸の刃を右手に持って、少女は左手でポンチヨの下からカッターを取り出す。げ。

いくつ入ってんだよ！

四次元ポケットか！！！！

「……っ」

しかし、呻き声をあげたのは、僕ではなく赤眼少女だった。瞬間で、僕から数メートル離れる。

何事かを見ると、少女の方には料理包丁が突き刺さっていた。

「なるほど。不意打ちに弱いようだな」

九重が得意げに言った。

なるほど。九重がやったわけか。

赤眼少女はキツと九重と僕を交互に睨んだ。

そして、肩から包丁を抜き取ると、ポンチヨの下から四本のバタフライナイフをとりだした。

瞬間。少女の姿が消えた。

「上だ！！！！」

九重の声に、頭上に視線を向ける。

少女は、僕らの頭上で四本のナイフを手に、振りかぶっている。慌てて転がって離れる。

僕らがいた場所に、どすどすと四本のバタフライナイフが刺さる。

怖え…！

スカートじゃねえし！

「陸人！」

少女は一瞬で僕の上に移動していた。

手にはフォークが握られている。

突き刺さそうとしてきたフォークを手にしたナイフではじき、落ちてくる少女の腹部を蹴りあげる。

女の子を蹴るといふ行為は当然気持ちの良いものではない。

そんなことも言つてらんないんだけどさ！

少女は床に転がり、苦しそうに小さく呻ると、跳ねるように飛び起きた。

お腹を押さえながら、僕を睨む。

そして、後ろに回り込んでいた九重に蹴り倒され、床に叩き付けられる。

九重はそのまま少女に馬乗りになり、少女の右腕をひねり上げて背中に回す。

これで、赤眼の少女は動けなくなったはずである。

僕も九重も安心した。

これで、大丈夫だろう、と。

少女を縛る縄でも探すか、と思つたところで。

九重の腹から血液が大量にあふれ出した。

「……！！！！？？」

僕と九重は同時に目を見開く。

「九重……！！」

九重の腹は、ドレスが破け、皮膚が綺麗に剥がされていた。

剥がしたのは、赤眼の少女のポンチョから突き出た鉄製のやすり。

押さえられていても、攻撃することが出来るのか！

迂闊だった。

と。

赤眼の少女を睨むと。

赤眼の少女も、目を見開いて驚愕の色を浮かべていた。

「ぐ……！陸人……！！」

九重は顔をしかめて、叫ぶ。

その瞬間、何かに押しつけられたように、僕の体が床に倒れる。横目で確認してみるも、僕の上には何も無い。誰も押さえてなんていないのに。

起き上がれない！！！！

何が、起こったのか。

思考しているときに。

後方から声が出た。

「死者が悪あがきするものではない」

冷たい。

低い、男の声。

視線だけを、男に向ける。

そこには、一人の青年が立っていた。

短い茶髪の、スーツを着た青年。

僕と同じ年かそれ以上に見えるその青年にも、特異な点が一つ。

瞳が、青い。

もう分かると思うが、白い部分はない。

真っ青。

青くて、蒼い。

青年は無表情に僕をみて、続ける。

「大人しく、あの世へ行くべきである」

冷たい、声で。

「まだ死んでねえ…っの」

僕は押しつぶされてかすれた息を漏らす肺に鞭打って言った。

そうか。

管理人は、六体だと、言っていた。

他にもいて、当たり前じゃないか。

青年はそんな僕の言葉を無視して九重に視線を向ける。

「知っているかと思うが、私の力は磁力操作だ。刃羽はなから離れんと痛い目を見るぞ」

「五月蠅い。陸人を解放しろ。陸人はまだ死んでいない」

九重は低い声で言う。

「だからこれから殺すのだろう」

「やめろ!!!」

九重の叫びを全く気にした様子もなく、青年は小さく手を振る。

すると、九重が赤眼の少女の上から跳ねるように離れ、吸いつけられるように壁に叩き付けられた。

「九重!!!!」

僕はかすれる声で叫んだ。

そんなことはお構いなしに、青年は手を振り続ける。

バキン。

「ぐあああ……」

九重の両腕の関節が逆方向に曲がる。

パキパキ。

「ひっ……うっ……」

両足と両腕の爪が剥がれる。

九重は痛そうに呻きながらも、ふらふらと立ち上がる。

「ふむ……しぶとい。刃羽。まずこっちから始末してしまえ」

刃羽と呼ばれた赤眼少女は立ち上がってポンチョの下から二本のかい鋏を取り出して、僕に向けて振りかざす。

動けない。

避けられない。

少女が鋏を放つ。

反射的に目を閉じる。

……。

何も、起こらない。

目を開けると、そこには……。

嫌な予感は、してたんだ。

「九重!!!!」

僕の視界の中心には九重が立っていた。

「おい…九重…!!!」

ふ、と。

九重はゆっくりと倒れ込んだ。

胸には、鉄が二本。突き立っている。

血が、流れ出る。

そして、赤眼少女は大きなナイフを、九重に向けて振り下ろした。

九重の胸に、深々と突き刺さる。

「九重!!!!…止める…!!!」

赤眼少女はポンチョの下から日本刀を取り出して。

九重の胴と首を、切り離れた。

「九重えええええええ!!!」

血飛沫が、舞う。

あれは。

もう。

生きてない。

生きてるはずが、無いじゃないか。

僕が死ぬことはあり得ないけれど。

九重が死ぬことは、あり得るのだ。

嘘だろ…。

僕を押さえつけていた何か解放される。

意味が、分からない。

現状を、理解することが、出来ない。
気持ち悪い。

僕は咳混じりに呼吸を確保して、嘔吐する。
青年が何かを言っているが、分からない。
だって…。

待てよ。

待て待て待て。

「…どうして…」

どうしてこんなことになった？

だって、昨日まで普通に、暮らしてたじゃん。

そうして、九重に会って。

今、九重は…。

分かってたじゃん。

自分は、お荷物だって。

こうなったのは

僕の、所為だ。

分かっていたことだ。

九重は、僕がいなければ、助かっていたはずなんだ。

生きていた、はずなんだ…！

僕の、所為だ。

好きな女を、殺してしまった。

ああ、本当に。

何やってんだ、僕は。

救いようのない馬鹿だな。

九重…。

何かが切れる、感覚がした。

「く……くく。あ。は。」

僕は、九重の首をそっと抱え上げる。

「あはは……ははは……」

そして僕は、

笑っていた。

関節の外れた肩を踏みつけ、掌に刺さったナイフを抜くと、少女の肩を押さえていた手の甲に突き立てる。

「が、あああ、あああ……」

少女は小さく呻く。

「ひ、ひぐう……」

そんな少女の背中に足を乗せる。

僕には今変な重力がかかっているようなので、少女の小柄な体には耐えられない重さらしい。

圧死してしまうかもしれない。

「あはは、は、ははは！」

ま、いいけど。

フツと、僕にかかっていた重力が抜ける。

「なんだ、お前は……！」

青年が驚いた顔で僕を見ていた。

「あ、は。はは！くははは！」

気絶してしまつたららしい少女の背から足をどけて、青年の元へ向かう。

「!?!」

青年は険しい顔で手を振る。

何かが僕を後ろに引っ張るような感覚があつた。

むう。歩きにくい。

「何故?!?!? 何故歩ける!?!」

青年は顔に恐怖の色を浮かべて叫ぶ。

「くひつ! ひはははつ!?!?!」

僕は、高らかに笑い続ける。

死 死 死 死 死

「おっそいなあ……。今日は学校休まなきゃ……」

空海氷月は歪んだスポーツカーの中で、横になって携帯電話をいじ

りながら言う。

「大丈夫かしら……」

姉の風雲は相変わらず車の屋根の上で、空を見上げながら心配そうにつぶやいた。

現在は日をまたいで七月三日の午前四時である。

空はうつすらと白んでき始めている。

二人はそこでずっと家族の帰りを待ち続けていた。

警察が来ても、氷月が上手く追い返し、変な野次馬は風雲が少々手荒な方法で蹴散らした。

「大丈夫つしよ。死にそうになっても、くが兄なら上手くやるよ。

くが兄は確実に空海家の血が流れてっからね。死ぬことなんてあり得ない」

氷月はきつぱりと言った。

「あの子は、やりすぎるから……。昔友達を殺しそうになったこともありますし……」

風雲は言う。

「あれトラウマだよ。あたしは世界で一番喧嘩売っちゃいけない人ってくが兄だと思っただよね」

氷月は携帯電話から顔をあげて苦笑混じりに言った。

「超笑顔だし。めっさ怖い。…それでも、嫌いにはなれないよね。」

怒ることなんて滅多にないし、と言って、携帯電話に垂れ下がったカニのキーホルダーを眺める。

風雲もそれを聞いて笑うと、

「当たり前です」

と言った。

そして彼女たちは待ち続ける。

死 死 死 死

「か…は…」

ネクタイで首を絞められていた青年は白目を剥きかけていたが、僕が手を放したので、飛びかけていた意識を戻す。
ああ。

「あはは…」

危うい一線を越えてしまうところだった。

人殺しになんて、なつては駄目だ。

ふう、と息を整えて、辺りを見回す。

肩や腹にナイフやフォークを刺して、涙目でむせている青年と、うずくまって気絶している少女。

そして、血の海に沈む九重の死体。

ああ。

やっぱり。

夢では、ないのか。

青年が、何かを言つて、少女を連れて出て行つた。

僕と九重だけが残された時計台。

僕も、九重の首と胴体を抱えて、外へ出た。

相変わらず、明るいきだ。

時計の針は十二時で止まっている。

僕は花畑の中心まで行くと、そつと九重の胴体を寝かせる。

それから首を抱えて、その場に座つた。

風が吹いて、赤と金の色をした九重の髪をなびかせる。

「僕は、無力だな…」

呟いて、自分の掌をちらりと見る。

「ほんと…気持ち悪い」

言葉を静かに吐いて、ゆつくりと体を倒す。

血を流し過ぎた所為か、視界と意識がどんどん薄れていく。

管理人の姿は見当たらないので、もう少ししたらあちらに戻れると思つた。

姉貴に、何て言おうかな…。

静かに思つて、

「ごめんね、九重」

目を閉じた。

君のおかげで今がある

七月四日。

僕は病院のベッドで目を覚ました。

「もう、くが兄！何してんのさ！」

目が覚めてすぐに、氷月に怒鳴られた。

五月蠅いやつだな。

「喧嘩したんだっいたら戦利品ぐらい奪って来てよね！勝ったんでしょ！？」

「お前の思考回路がせめてあと2センチくらい僕に寄ってくれたらな……」

「は？何言ってるの？まだ寝ぼけてんの？」

「寝ぼけてねえよ」

こいつと話すと疲れる。

「結構危なかったらしいよ？出血。かざ姉がくが兄担いでダッシユで病院に運んでくれたおかげだね！」

「ダッシユで!？」

何故ダッシユ？

「かざ姉が車壊しちゃったから」

「またかよ!!!」

親父に怒られんぞ……？

母さんは怒らないだろうけど。

そこに。

姉貴が入ってきた。

また車壊したんだって？と聞こうとしたところで。

僕は目を見開いて、言葉を失った。

驚愕。

三年分くらいの驚きを今使いきったんじゃないか、というくらいの驚愕だった。

姉貴の後から。

九重千切が入ってきた。

「おお。目を覚ましたのか。良かった！」

九重は美しい笑顔を見せて言う。

「あ、僕ちよつと用事思い出しました」

「ベッドの下に用事がある子なんていません」
捕まった。

逃亡失敗。

姉貴には敵わないなあ、全く。
と。

「えつと…九重…さん？」

「何を言っているのだ。当たり前だろう」

小首を傾げられた。

可愛いな。

「何故…生きて？」

「生き返ったから…か？」

いやいや。

訊かれても答えられませんが！

むしろ尋ねてる側！

「んー、とな。今更明かすと…」

九重は少し言いにくそうに、

「わたしは人間じゃないんだよ」

と、言った。

「風邪にはパブロン…！」

「落ち着け！」

落ち着けますか！これが！

死んだと思つた人が生きてて、その人からいきなり人外宣言!?

何のファンタジー小説だよ!!!

「とうかわたしは…」

九重は苦笑して、

「管理人なんだ」

泣きそうだ。

訳が分からな過ぎる。

「六体の人型管理人の中で、唯一こちらの世界に来られた、管理人
そう言つて、気まずそうに頬を搔く。

「体質というのも…半分は嘘だ。あの管理人がわたしを連れ戻そう
としていたから、わたしは“狭間”に入ってしまったのだよ」

「いや、でも…目が」

九重の目は碧だけど白目はちゃんと見える。

「そのことは後々、な」

九重は笑う。

その笑顔ですべてを許せてしまう僕は、甘いんだろうな。

「わたしは管理人だから“狭間”にいればある程度の傷は治るんだ。
それに…」

九重はまた、晴れるような笑顔を浮かべて、

「陸人の愛をたっぷり受けたからな。

陸人に抱きしめられたから生死に関わる傷だったけど、治ったんだ」

恥ずかしいことを言われた。

姉貴にバレたじゃん。

「まあ、わたしが生き返らなかつたら陸人は戻つて来られなかつた
のだからな」

ふうん。そうだったんだ。

まあ、何にしても。

良かった。

生 生 生 生

僕はしばらく入院、ということになったらしい。

しかしそのことに関して親父は大丈夫か、と心配してくれただけで、何も訊いたりしてこなかった。

母さんは、

『今はロンドンでめっちゃうまフランスパンを食べてまーす（笑）』

P・S 根性で治せ！』

というふざけた内容のメールを送ってきただけだった。

なんでロンドンでフランスのパン食ってたんだよ。

イギリスパンを食べ。

姉貴は毎日二十本のバナナを持ってきた。（僕は猿か）

氷月は毎日数冊のGL本を持ってきた。（勿論丁重に投げ返してやったが）

そして一週間たった七月十日。

僕は病室にお見舞いに来てくれた九重と（というかいつも面会謝絶時間以外はここにいる。クラスの奴らにはギャーギャー騒がれた）

二人きりだ。

「陸人は、格好良かったぞ」

九重は林檎を剥きながら言う。

実がほとんど皮にくつついたまま挟られていってしまう。勿体ない。

九重はあまり料理が得意じゃないらしい。

「なんの話だ」

「気持ち悪くなんて、なかったからな」

「お前死んでたんじゃねえの!？」

「心の目で見えた」

「お前は何でも出来るのな!」

何でもでき子ちゃん。

「愛の力だ」

「格好良いな！誰だよお前」

「九重千切だ！」

「格好良く名乗られたー！！」

胸を逸らすな！

なんか困る！

まあでも、そうか。

気持ち悪くないってさ。

僕の悪癖を格好良いって言われたのは初めてかもしれない。

本当に心の目とやらで見えていたのかどうかは怪しいが。

「なあ九重……」

僕は九重から目を逸らして、照れくさくも、言う。

「九重が、好きです。僕と、お付き合いから始めて下さい」

九重は不服そうだった。

「もう婚姻届まで書いたのに……」

「お前住所不定だろ！？」

てな感じのやり取りがあつて、九重には笑顔で、

「わたしも、陸人が好きだ。大好きだ。愛してる。」

と言われた。

負けた気がする。

そして、僕らはお付き合いを始めることになった。

空海陸人十八歳。

初めてできた彼女は、変だけど、すごく美しく格好良い人です。

君のおかげで今がある（後書き）

ここまで読んで下さった皆様。

本当にありがとうございます。

『え？ナニ言っちゃってんの！？』は、これで完結です。

この話は続編を作る予定なので、これからも宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8739q/>

え？ナニ言っちゃってんの！？

2011年10月8日15時44分発行